

新規就農ではなく、農業での起業です

最近、二人の若い経営者を訪ねた。秋田県大仙市の鈴木貴之さん(40歳、(株)ライスボール代表取締役)と静岡県三島市の鈴木達也さん(45歳、フールドカルチャー・ルネッサンス代表)の二人である。

二人とも農家の育ちではない。いわゆる「新規就農」。それも農業外から起業してわずかな期間にもかかわらず、明確で確実な未来を見定めている。困難があるのは当たり前である。でも彼らは就農ではなく、農業を手段として起業した。

鈴木貴之さんはコメ作りを始めるとともに会社を設立し、5年経った今年の作付面積は約70ha。そんな貴之さんの社名は、つまり「おにぎり」である。その名のとおり彼はコメ農家になったのではなく、おにぎり屋さんとしてコメ作りを始めた。そして、今年6月を

めぐりに東京渋谷の代官山に1号目の店舗を開店する。

一方、鈴木達也さんはそれまで勤めていた東京のIT系会社を辞めての起業である。15年前、家を買おうと場所探しをするなかで、新幹線を通えば45分で品川に着く三島に居を

構え、家庭菜園を始めた。新幹線通勤をしながらまさに趣味の家庭菜園であればこそ多種多様な野菜作り。しかも料理を思い描きながら。

当時、「料理の鉄人」がTVでブームになっており、その番組が大好きだった。それが高じて4、5年前から、料理人や料理を考えればこそさまざまな野菜や伝統野菜作りを面白がれる人々を巻き込んだ仕事ができなかつた。

そして1年半前に退職。東京と三島のレストランのオーナーシェフ二人に自分の夢を語り、最初の顧客になつてもらった。すでに二人の専従スタッフを雇い、創業初年度の売り上げは約1000万円。今年は2000万円超えを目指している。

まだ退職金で食いつないでいる部分もある。彼はモノとしての野菜ではなく、野菜やお客さんを巻き込んだの野菜作りを通じたコトを売る。最初の2軒の顧客やFacebookを通して、すでにレストランが50軒、個人顧客が66人になっている。

以前にも書いたが、僕は「就農」とか「担い手」とかいう農業界特有の言葉が嫌いだ。いまだに貧しい農民・農村というイメージのまま誇り

なく政治にしがみつくと農業界だからこそそんな言葉づかいを続けるのだろう。

そもそも「就工」だとか「就商」なんて言葉は聞いたことがない。ましてや「新規就農」。この時代に報いの少ない汚れ仕事をあえて選ぶ特別な若者というイメージを作り上げ、そこにも年間150万円なんていうお手当まで出す制度があったりする。でも、僕はその制度は新規に起業しようとする者を甘やかす、情けない経営者を育てることになるのではと危惧する。どんな起業も大多数の者は失敗して廃業あるいは出直すことになる。それが当たり前のことなのだ。

かつて農業とは人々の暮らし方だった。もうそれが成り立つ時代ではない。また、それを政治的・行政的に無理やり保護したとしてもうまくはいかないのである。農業界では新規に農業をすることがいかに大変であるのかのように語り、だからそれに取り組む者に保護が必要であるという。そんなことは農業に限った話ではない。

この二人に共通するのは、コンセプト・顧客・戦略を定めた事業計画を立てる才覚があるということだ。もうこれ以上農業・農家を甘やかす政策はやめにしよう。

江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。まったく管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。